

## 紅海南西部における遊牧民の定住化現象に関する研究(4)

～ジブチのスラム型住居に見られる遊牧民の空間概念に関する分析～

正会員 小草 牧子

紅海地域・遊牧民・定住化・スラム

## 研究の背景と目的

東アフリカ地域に位置するジブチ共和国は、近年、遊牧民の定住化による都市近郊でのスラム形成が問題となっている。このスラム問題への対応策として、さまざまな住宅計画やロケーション計画が行われているが、その結果、スラムの再形成やコミュニティの破壊といった新たな問題を生み出し、解決に到っていないのが現状である。これは、本来土地から自由である遊牧民が持つ「空間」に対する概念が定住民のそれと異なることから起こっていると考えられる。スラムの再形成を防ぎ、適切な居住環境を提供するためには、まず、定住化遊牧民の土地利用について実態を把握し、遊牧民の空間概念を分析することが必要である。よってこの研究は、定住化遊牧民が使用する住居と空間について、遊牧型住居と比較し、その傾向を分析するとともに、共通の空間構成要素を抽出し、遊牧民の空間概念を考察することを目的とする。

## 研究方法

遊牧型住居と定住化遊牧民の使用する定住型住居における比較内容は、各機能スペース（寝所、台所、共有スペース）の占有面積とその位置関係（配置パターン）とする。これまでに調査したジブチ北部地方に見られるイッサ族が使用する遊牧型住居に関して、その住居内部における各機能スペースの割合とその配置パターンの抽出、また、バンド（生活・移動をともしする住居群で、通常、近親者などで構成される）を形成している場合、その各住居の配置パターンを分類する。定住化遊牧民が使用する定住型住居に関しては、ジブチ郊外のスラム地区 Babash と PK12 地区に見られる住居について、敷地、建蔽率、各機能スペースの面積占有率等を数値化して抽出する。また、その建物、各機能スペースの配置パターンを分類する。サンプル数は、遊牧型、定住型（2地区）、それぞれ10戸（計30戸）とし、それぞれの比較項目について、平均値を出し、比較するものとする。なお、Babash地区は敷地境界線に関して、法的制限がなく、居住者が自由に決めたもので、PK12は、もともと敷地境界線が定められているという違いがある。自然発生的に形成された Babash 地区は、計画的に整備された PK12 と比較してより遊牧型に近い形態を表していると言える。



図1 遊牧型住居



図2 定住型住居 (PK12)

## 遊牧型住居の機能スペースとバンドタイプ

表1は、ジブチ北部に見られるイッサ族の遊牧型住居について、各機能スペースの平均占有面積を算出したものである。遊牧民にとって、敷地や私有地という概念は存在しないため、土地は自由に使えるが、移動可能式のシ

	遊牧型 (ISSA)
土地利用の法的制限	なし
住居規模	9.18 m <sup>2</sup>
一人当りの占有面積	1.61 m <sup>2</sup>
寝所占有率	19.9%
収納スペース占有率	4.3%
台所スペース占有率	3.2%
共有スペース占有率	70.4%

表1 遊牧型住居の内部空間における占有率

ステムや組み立て・解体の容易性から、その住居規模に制限が生じる。平均住居規模は9.18 m<sup>2</sup>であるが、戸外での活動も多く、生活スペースは住居規模に制限されない。住居内部の主な機能は、寝所、台所、収納とそれ以外の共有スペースであり、遊牧型住居においては、共有スペースの占める割合が、7割近くと最も高い。通常、この共有スペースは住居の中心にあり、台所や寝所の各機能の延長スペースとして使用されることが多い。図3、図4は、イッサ族の遊牧型住居に見られる典型的な機能配置パターンである。これらのパターンで共通しているのは、台所の位置であり、通常、入り口脇に設けられている。図3のタイプAは、最も多く見られるもので、台所と寝所、入り口と収納スペースのそれぞれが最も離れた場所に配置されるパターンである。タイプBは、入り口と寝所、台所と収納、のそれぞれを最も離れた場所に配置するパターンである。また、図5と図6は、イッサ族の遊牧民が形成する代表的なバンドタイプであり、その違いはバンドを形成する人間関係と世帯数によ

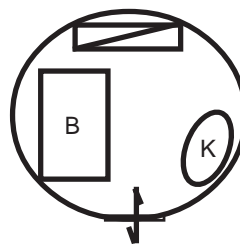


図3 遊牧型住居タイプA

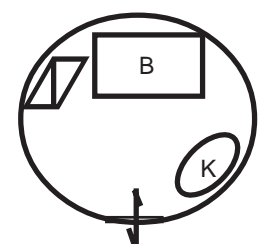


図4 遊牧型住居タイプB

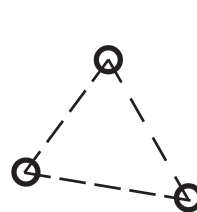


図5 バンド囲い型タイプ

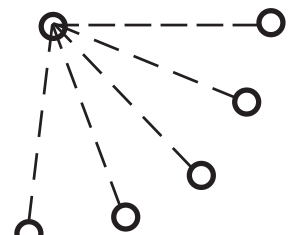


図6 バンド放射型タイプ

A study on the nomad settlement in the south-west of Red sea area  
Analysis of the nomad's concept toward the space in the slum-type dwelling

OGUSA Makiko

と考えられる。図5は3～5世帯ぐらいで形成される小規模なバンドに多く見られ、通常、近親者で構成される。中心にコミュニティスペースをとり、それを囲うような形で住居が配置される(囲い型)。となりあう住居同士は、ほぼ均等な距離(平均距離:12.5m)をおいて建てられる。、図6は、6世帯以上からなる大規模なバンドに多く見られ、これらを構成しているのは近親者と限らない。1つの中心となる世帯から均等な距離(平均距離:22.5m)をとりながら円弧を描くように各住居が配置される(放射型)。円弧上のとなりあう住居同士もまた、均等な距離(平均距離:14.7m)をとって建てられる。

#### 定住型住居の機能スペースと配置パターン

表2は、定住化遊牧民の使用する定住型住居における各機能スペースの占有率の平均を算出したものである。Babash、PK12ともに、一人当たりにおける居住面積がほぼ同じである。また、敷地規模に違いがあるが、建蔽率を考慮すると2地区の建築面積はほぼ同じ(約22㎡強)となる。共有スペースは、両地区ともに最も大きく、そこに含まれる日陰スペースは、屋根だけを取り付けたものであるが、遊牧型住居の戸外活動を行う木陰などのスペースと類似している。台所スペースの占有率が遊牧型のそれと比べて大きいのは、便所スペースが含まれているためである。平均部屋占有率は両地区とも30～35㎡であるが、経済状況や居住人数によって各住居の部屋数は異なる。図7～図12は両地区に共通する典型的な機能配置パターンを分類したものである。図7～図10までのタイプは、すべてエントランス脇に台所スペースが配置されている点が遊牧型のそれと同じであり、また定住型の台所スペースと部屋の位置関係は、遊牧型住居内の台所と寝所の関係に類似している。図7の1部屋の場合、キッチンから離れた場所に部屋を配置し、部屋数が増えると、その配置は敷地の各コーナーに分散される形で配置され、最終的には図10のように、中心に共有スペースをとる囲い型となる。また、図10～図11は、もともと部屋と台所スペースが隣接してエントランスから最も離れた場所に配置されており、部屋数が増えたとともに、敷地境界線に沿って配置されるエントランスを中心とした放射型となる。これらの最終的な二つの配置パターンである囲い型と放射型は、遊牧型住居のバンド構成パターンと同じであることから、遊牧民の持つ空間構成概念の1つであると推測できる。

#### まとめ

これまでの遊牧型住居と定住型住居における空間構成に関して分析結果をまとめると、遊牧民が定住化した場合、部屋には寝所と収納機能が求められ、台所はエントランス脇に配置されることが多く、各機能は独立した建物に分散され、囲い型か放射型に配置される傾向にあり、屋外の共有スペースは敷地面積の6割程度が適当である、ということが言える。一日のほとんどを屋外で過ごす遊牧民にとって重要なのは、建築面積の大きさよりも共有スペースの大きさである。

	定住型(Babash)	定住型(PK12)
土地利用の法的制限	なし	あり
敷地規模	50.75 m <sup>2</sup>	60.00 m <sup>2</sup>
一人当たりの占有面積	7.7 m <sup>2</sup>	7.8 m <sup>2</sup>
部屋数	1.8	2.4
建蔽率	44.2%	36.9%
部屋占有率	34.5%	30.8%
台所・便所占有率	6.8%	6.2%
共有スペース占有率	57.5%	60%
屋外日陰スペース占有率	14.3%	10.3%

表2 定住化遊牧民が使用する定住型住居の内部空間における占有率

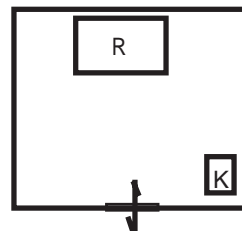


図7 定住型機能配置タイプ1-a

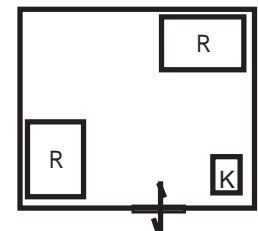


図8 定住型機能配置タイプ2-a

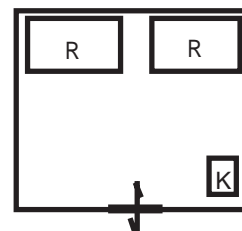


図9 定住型機能配置タイプ2-a'

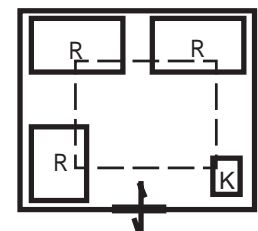


図10 定住型機能配置タイプ3-a

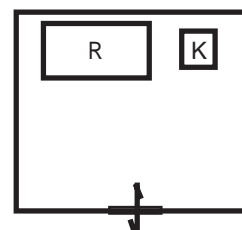


図11 定住型機能配置タイプ1-b

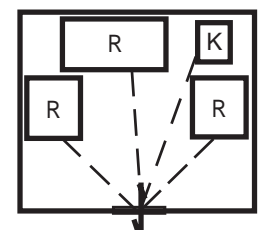


図12 定住型機能配置タイプ3-b

\* B-寝所、K-台所、R-寝室と収納を兼ねている、/-収納スペース

#### 結

本研究では、遊牧民の持つ空間概念を考察するため、平面構成のパターン化と数値化を手法として用いたが、さらに3次元における空間分析が求められる。また今後、定住化遊牧民に適した土地利用計画や住宅計画を考える上で、建築構法技術に関しても、在来構法から学ぶ適切なシステムを考える必要がある。途上国における都市問題は、建築的視点だけではなく、その地域に住む人、社会、生活を含めた文化人類学的視点からの考察が求められることはいうまでもない。